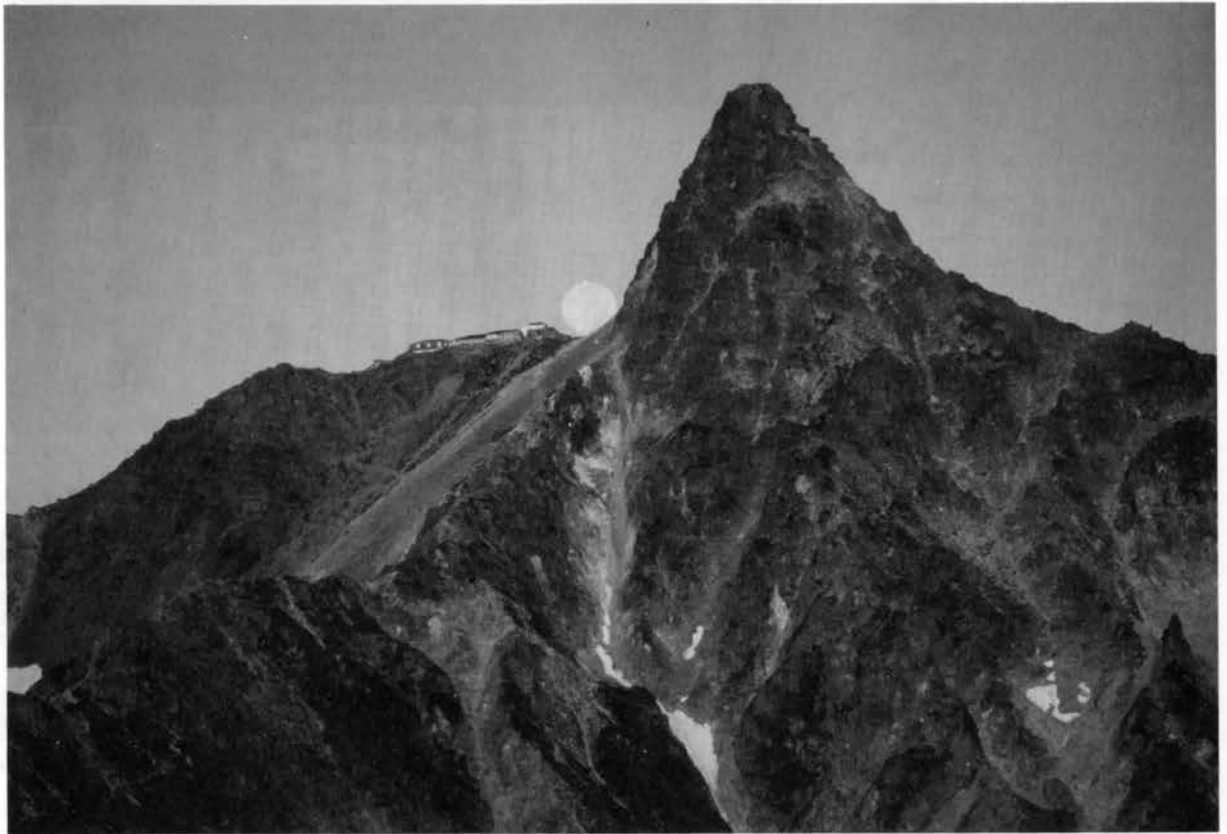


山と博物館

第38巻 第11号 1993年11月25日

大町山岳博物館



槍ヶ岳に沈む月 写真と文 百瀬 典明

緑色の裾野を持った槍ヶ岳を撮影しようと、七月には新穂高温泉から入山するも、雨々々、八月に入ってから、横通岳・大天井岳方面から撮影しようと、三回も出掛けたけれども、その姿を見せてはくれず、そして夏は終わった。

今年の梅雨明け宣言は、七月二十七日に出されたものの、それも何時しか撤回され、梅雨明けの無い冷夏で、撮影のさっぱり出来ないう年でありました。

七・八月の雨量は、平年は二百三十ミリメートル、今年には四百ミリメートルと、平年比百分之増しの大量の雨が降り、上高地では梓川の護岸が何箇所も被害を受けました。横尾から槍沢ロッジまでの道は、いたる所にぬかるみができており、今年には乾いた登山路を歩くことはありませんでした。

緑薫る槍ヶ岳が適わないなら、紅葉あるいは新雪の姿を求めて二週連続で槍沢から西岳へ通いました。

九月二十二日

冷たい雨の中を撮影しながら西岳を目指す。ふと振り返れば、三千メートルの稜線は雪化粧し雨に霞む槍ヶ岳の姿を撮らえることができました。

十月一日

前日の大雨とは打って変わった青空の中を、今日もまた西岳を目指す！

槍沢から別れ水俣乗越へ向かう道は、木々に包まれた趣ある道です。

雨上がりの瑞々しい黄葉に抱かれていると、体が黄色く染まるような中を独り占めしながら歩いて来ました。

皆さんも、是非歩かれることをお勧めします。槍ヶ岳は、五月に涸沢岳から望んで以来百五十日振りに穂先を現わしてくれ、更に満月が槍ヶ岳に沈む姿を撮影することができました。今後、大自然の中、感動する心を見失わずに、撮影を続けて行きたいと思えます。

(日本山岳写真協会松本支部)

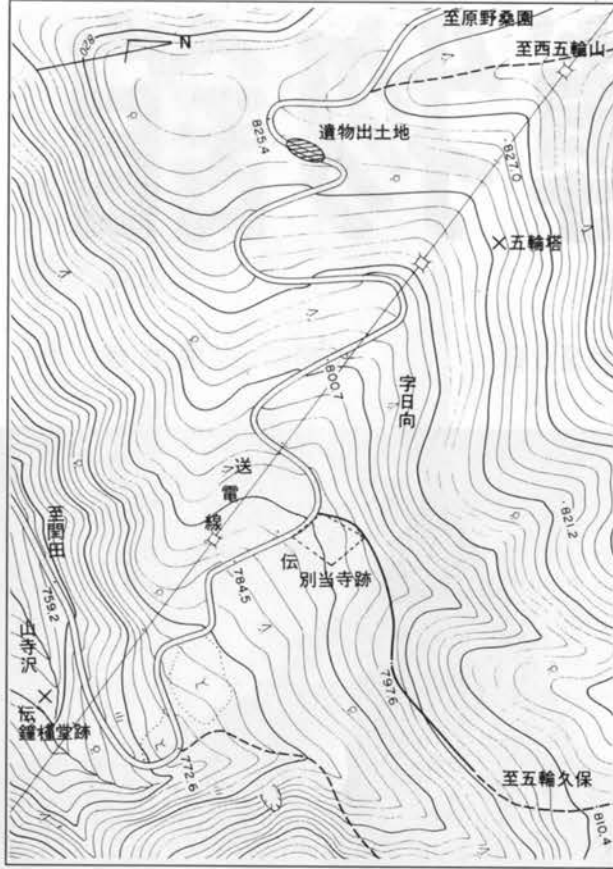
山寺廃寺跡の出土遺物

幅 具 義

山寺廃寺の跡は、大町市社の北岡田に流れ出る山寺沢に沿って五〇〇メートルほどさかのぼった、西五輪山の懐の傾斜地にある。南東に向けた洞地形の緩傾斜面は、日当りもよく湧水にも恵まれていて、四囲は山であるため外界と隔絶されており、その昔ここに立っていた山寺の落ち着いたたずまいを、いまでも連想するに十分なところである。

昭和三四年のこと、この山寺跡を経て、山裏の原野桑園に通じる山道の改修工事が地元の人たちによって行われたが、その折山寺

跡の上方部の地表下約五〇センチのところから、火葬墓関係の遺物が偶然出土した。遺物の内容は、古瀬戸四耳壺一・古瀬戸瓶子一・青白磁水注一・土師質小皿一・写経石一と多量の火葬骨などである。計画的な発掘でなかったため、これら遺物の出土状態を正確に知ることができなかったことは遺憾であるが、工事に従事した人々の記憶を頼りに、出土状況などを復元的に調査考察したところ、遺物の形状や出土状態は、およそつぎのようであったことが判ってきた。



1、古瀬戸四耳壺と土師質小皿

四耳壺は、現存器高二七・四センチ、肩張最大径二三・二センチで、地表下五〇センチから直立して出土した。底部は、四耳壺が埋められた時すでに欠失していたらしく、穴のあいた底には内側から土師質の径八・四センチの小皿を下向きにしてふさいであった。壺中には黒色土に混って火葬した人骨の小片や骨粉・木炭片・素焼きの小土器片などが充満していた。壺の周囲にもまき散らしたかのよう小骨片や骨粉があった。

四耳壺の上にはおよそ二〇センチほどの土層を置いて、後述の写経石が平らに埋められていた。これらの状態から、そこは、四耳壺を火葬人骨の蔵骨器として用いた写経石を供養のために副納した火葬墓であることが明らかとなった。

四耳壺は、紐土を巻き上げて成形し、ロク口で整形したものであることが器壁の状態から見とれる。ふつくと張った肩の上には、数条の沈線を施してつまんだような山型の四つの耳が、口縁をはさんで対称の位置に、耳穴を上下に向けた横耳の形で貼り付けられている。口頸部分は外に反りかえり、大きく開口している。釉薬は、木灰を使った灰釉で、黄緑色を呈して薄く壺全面を覆うが、一部には偏ってなだれて釉縞を見せるなど、施釉はまだ安定していない。これは、木灰に混ぜる長石の量が足りないことを物語っている。

しかし、壺全体は整った美しい形をしていて、張りのある肩や外反する口頸部の形から推して鎌倉時代中期（二三世紀中ごろ）に窯業の町現愛知県瀬戸市にあった窯で製造されたもので、いわゆる古瀬戸とよばれ、鎌倉時代中期から室町時代にかけての長い年代

にわたって造り続けられた古瀬戸四耳壺の中でも、その初原期に近いものであることが確実視されている。釉面の淡いが艶のある光沢をみていると、七〇〇年の歳月を感じさせないみずみずしささえうかがえる。

なおこの形の四耳壺は、中国の宋代にその原型があり、平安時代末期の日宋貿易によって多量に輸入され、蔵骨器や経筒外容器として用いられており、鎌倉時代中期これにならって瀬戸で大量に製造されてから、主として東国でこれを蔵骨器として多用されてきたようである。

この四耳壺の底部が欠失しているのは、わが国の葬礼慣習の中に、完全な形の器物を一部欠いて使う例が多いことから、廃品を再利用したのではなく、故意に底を抜いたものとみたい。底部とその下に続く高台部分が見当たらないが、ほかの同時期の四耳壺の例から考えて、三センチほどの高さをもつ高台が、裾を開いた形で取り付けられていたものと推測される。なお胎土は灰白色で焼きがよく、十分な陶質となっている。



古瀬戸四耳壺と土師質小皿



川原石に書かれた法華経第20卷

この二つの瓶子は、寸法にも器型にも幾分差がみられる。瓶子1は、頸から肩にかけての部分が平たく、そのため肩から胴にかけての丸味をきわ立たせ、ほどよい腰のすばまりや裾の開きと相まって、器全体を落ち着きのあるものにさせている。成形は、四耳壺の場合と同じく紐土巻き上げをしたあと、ロクロで整形を

している。これは瓶子2も同様である。瓶子1の口縁部は内側に傾く縁帯をもち、頸を細頸とする。肩先と肩中央とに、それぞれ三条ずつの櫛目沈線文を入れて、瓶子を装飾している。底は平底で、裾部に軽い面取りがみられる。

4、青白磁の水注
四耳壺や瓶子と近接してこの青白磁の水注（水差し）も火葬骨を内蔵して出土した。高さ七センチ、口径二・二センチ、胴張最大径九センチの大きさで、一見急須型をしているが、注ぎ口と把手が一直線上に取り付けられ

平安時代風な書きぶりであり、これからすると火葬骨の埋納のとき、霊供養のためこれを書き、同時に埋めたものと考えたい。四耳壺の造られた鎌倉時代中期における葬送供養儀礼の様子を物語る貴重な事例である。
なお、後になって、山寺庵寺の入口地点から、拳大の川原石に法華経第一三巻の勸持品の一部を書写した経石が発見されていることを付記しておく。

瓶子2は、器高二九センチ、口径は細頸の残存部分で四・三センチ、肩張最大径一九・四センチ、底径一一センチで、胴部にはほぼ三角形をした大きな欠失部分があるほかは、完存している瓶子である。（写真では欠失部分は裏面に写っていて見えない。）
瓶子2は、器高二九センチ、口径は細頸の残存部分で四・三センチ、肩張最大径一九・四センチ、底径一一センチで、胴部にはほぼ三角形をした大きな欠失部分があるほかは、完存している瓶子である。

胎土はいずれも白色で、器体中央から下には焼成の強さによって釉の欠落があり、胎土の表面に赤茶色の変色が見えている。釉薬は木灰の刷毛塗りで、肩の釉ムラが著しく、胴部にはなだれのあとが見え、また釉のはじけた跡があげた状になって見えている。
以上みてきたところの二つの瓶子の特色を要約すると、肩が丸く張り出し、腰が細くすぼまり、裾に到って僅かに開くという、いわゆる縮腰型の形状といえ、灰釉の施釉状態と併せて考えると、四耳壺と同じ、古瀬戸の初源期に近い鎌倉時代中期（一三世紀ごろ）の製造であるといえる。
前述の四耳壺や後述の水注と近接して出土したのであるが、四耳壺同様に黒色土とともに火葬した人骨が細片となって収容されていた。瓶子1の胴部の欠失部分は比較的大きな筒所でもあるため、発掘時点での欠損ではないかと欠失部分を探したが、ついに発見できなかった。
なお瓶子は、神前に御酒器として奉納され



古瀬戸瓶子2



古瀬戸瓶子1

2、写経石
四耳壺の上方から、隅丸方形で扁平な凝灰岩質の川原石に、法華経を墨書した経石が出土した。経文は、法華経第二〇巻の常不軽菩薩品で、通常の書き方とは逆に、左端から縦書きしている。これは書いた文字を手でこすり消すことを恐れての配慮からでもあろうか。表裏・側面ともびつしりと書かれているが、書くところが不足したせいも、あるいは別の石に続きを書いたか、常不軽菩薩品全体の三分の二ほどのところで終わっている。
ともかくかなり書き馴れた僧が、かなりの速度で書き進めていることがうかがえる。多用している異体字や書体から見ると、多分に

3、二個の古瀬戸瓶子
瓶子1は、器高二七・八センチ、口径四・八センチ、肩張最大径一九・五センチ、底径一一・三センチで、胴部にはほぼ三角形をした大きな欠失部分があるほかは、完存している瓶子である。
（写真では欠失部分は裏面に写っていて見えない。）
瓶子2は、器高二九センチ、口径は細頸の残存部分で四・三センチ、肩張最大径一九・四センチ、底径一一センチで、胴部にはほぼ三角形をした大きな欠失部分があるほかは、完存している瓶子である。

胎土はいずれも白色で、器体中央から下には焼成の強さによって釉の欠落があり、胎土の表面に赤茶色の変色が見えている。釉薬は木灰の刷毛塗りで、肩の釉ムラが著しく、胴部にはなだれのあとが見え、また釉のはじけた跡があげた状になって見えている。
以上みてきたところの二つの瓶子の特色を要約すると、肩が丸く張り出し、腰が細くすぼまり、裾に到って僅かに開くという、いわゆる縮腰型の形状といえ、灰釉の施釉状態と併せて考えると、四耳壺と同じ、古瀬戸の初源期に近い鎌倉時代中期（一三世紀ごろ）の製造であるといえる。
前述の四耳壺や後述の水注と近接して出土したのであるが、四耳壺同様に黒色土とともに火葬した人骨が細片となって収容されていた。瓶子1の胴部の欠失部分は比較的大きな筒所でもあるため、発掘時点での欠損ではないかと欠失部分を探したが、ついに発見できなかった。
なお瓶子は、神前に御酒器として奉納され



宋の青白磁水注

曾根原の源花山盛蓮寺は真言宗寺院で、室町時代中期に建立され

ている点、急須とは異なっている。扁平な胴は、肩部から下に向けて微かな縦縞のある隆起をみせ、ひと昔前までこの地方でも栽培された地カボチャ型をしている。肩から上には、葉先を上向きにして八枚の葡萄の葉が、また肩先には下に向けて垂れ下が

呈している。施釉は、底から一センチほどの分を残して、青白磁釉をたっぷりかけてあり、その釉が器壁の縦縞や葡萄文などの浅い彫りの部分に流れ込んで、そこに淡い青色の影をつくり出し、文様を浮き立たせる効果をあげている。

た観音堂(重要文化財)のある寺として有名であるが、この寺の縁起の中に、盛蓮寺はかつてこの山寺の地にあったことを伝えている。山寺というのは単に山にある寺という意味ではなくて、真言宗や天台宗のいわゆる密教寺院を指している。そこは密教の僧侶が修学し経論を講ずるといった学問寺のことを山寺というのである。真言の寺盛蓮寺の前身は、まさにこの山懐に建っていた山寺であった。計画的な発掘調査がなされたならば、その威容を詳しく知ることができよう

そのような中であって、ここから出土した古瀬戸の四耳壺・瓶子や宋代の青白磁水注は、山寺の歴史をひもとく重要な資となる。すなわち、七〇〇年前の時代にあつては、限られた人すなわち寺社や武士・富農層などの極めて一部の人たちだけが手に入れることができ



五輪塔

の高いところに仁科氏をおいでみることができるのである。ちなみに、山寺廃寺跡出土の火葬骨は、盛蓮寺歴代の墓地の内をお借りして改葬し、供養していただいていることを付記して、この稿を終る。(大町市文化財審議委員長)

博物館だより

資料寄贈ありがとうございます。マッキンレー遠征資料(一九六〇年) 5点。明治大学体育会山岳部 スキー繪具 12点。埼玉県熊谷市末広 銀持六男

ルックザック・ヘルメット等 京都市左京区下鴨 高田光政

山と博物館第38巻第11号

発行所 千歳長野県大町市 TEL 026-221-1111 大町山岳博物館 印刷所 長野県大町市後町 大糸タイムス印刷部 定価 年額 一、二二〇円(送料共(切手不可)) 郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)